

鹿児島方言のアクセント型交替とその要因について

太 田 一 郎

はじめに

現在の鹿児島方言においては、図1と2に示すように、従来二型アクセントのA型語であったものがB型音調で、またはB型語がA型音調で産出される現象があることが指摘されている（窪蘭2006, 竹村2010, 太田2012）。

	L L H もみじ	L H L かえで	L H L もみじ	L L H かえで
B型	L L L H もみじが	A型	A型	B型
		L L H L かえでが	L L H L もみじが	L L L H かえでが
			東京方言の起伏式に対応	東京方言の平板式に対応

図1. 鹿児島方言のアクセント（従来型）

図2. 鹿児島方言のアクセント（交替型）

従来は平板式のB型音調で発音されていた「もみじ」が起伏式のA型で、逆に従来は起伏式A型のはずの「かえで」が平板式のB型音調で発音される。これを本稿では「アクセント型の交替」と呼んでおく。¹ このアクセント型の交替とは、従来型の鹿児島方言では音調の下がり目のない平板式音調の「もみじ (LLH)」が、標準語では頭高の「もみじ (HLL)」と音調の下がり目を伴って（つまり起伏式音調で）発音されることをまねて、鹿児島方言でも「もみじ (LHL)」と下がり目を伴って発音されるようになること、または従来は起伏式の語が平板式で発音されるようになることである。言いかえれば、語内のピッチ下降のある・なしを標準語にそろえようとする現象と解釈できる。

Kubozono (2007: 323) は、この現象はテレビ、ラジオ等のメディアとの接触によりに東京語に「さらされた(exposed)」ことにより生じたものと推測している。太田・光瀬(準備中)の高年層話者(1955年以前生まれ)たちの多くが平山(1960)と同じ従来型のアクセント体系を十分維持していること、また音節を音調単位とする二型アクセントの音韻システムの基幹部分は若年層でも失われていないことを考えれば、アクセント型交替の原因は外的要因によるところが大きいのではないかと考えられる。² しかしながら、窪蘭の一連の研究ではアクセント型交替がどのような条件により生じるかについての言及は十分なされていない。本稿では、いくつかの言語内、言語外要因とアクセント型交替との関連を統計分析によりとらえ、言語変異理論からの考察を試みる。

1 本来この問題は鹿児島方言のトーンの性質と日本語のピッチアクセント体系との関連も考慮に入れて考察すべき問題であるが、ここではその問題についてはこれ以上ふれず、アクセント型の交替と位置づけて議論を進める。

2 窪蘭(2007)のように、複合語規則の弱化などの音韻変化の指摘はあるが、二型アクセント体系は若年層話者の言語にも内在していると考えられる (cf. 太田2012, 太田・竹村・二階堂2013, 太田・光瀬 準備中)

1. 調査

1.1 概要

本稿の分析対象は、2010年から2012年に札幌、福岡、鹿児島、東京で行った「複合アクセント句の音韻的従属 (Prosodic Subordination in Multiple Accentual Phrase) の変異」に関する調査の一部である (cf. Stuart-Smith and Ota 2014)。この調査自体は、複合アクセント句 (MAP) における音調を主たる研究対象とするものだが、MAP内のピッチ変動の分析にはアクセント型の確認が欠かせないので、スライドとリストの単語を読み上げる単語読み、単文読み、台本のある会話の各タスクで語彙アクセントもデータ化していた (太田ほか2013)。本稿で利用するのは、そのうち3、4音節語を含む単文読みと台本のある会話で収録した音声資料である。

1.2 調査語彙

調査対象の語彙は表2の8語である。3音節語、4音節語のそれぞれでターゲットのMAPを構成する。その組み合わせと数は表3、4に示すように、連結部分の助詞を含めると、単文読みタスクでは合計16、台本会話タスクでは合計8となり、方言と標準語のそれぞれのスタイルで各話者24 (合計48) のデータを収集した。今回の分析は、そのうち方言スタイルで得られた各話者24個のデータの20人分、合計240個 (ただしひとつのMAPは2語から成るので合計語数は480語) である。

音節数	前部要素 (地名)	後部要素 (一般名詞)
4	青森 (B) 【起伏】 宮島 (A) 【平板】	おみやげ (B) 【平板】 * 煮魚 (A) 【起伏】 *
3	長野 (B) 【起伏】 上野 (A) 【平板】	飲み屋 (B) 【起伏】 煮物 (A) 【平板】

表2. 調査語彙 (単文読みおよび台本のある会話において)

アルファベットは従来の鹿児島アクセント型を、【 】内は標準語の音調を示す

*は鹿児島方言と標準語の音調型 (平板か起伏か) がもともと一致している語である

音節数	前部要素 (語1)	助詞	後部要素 (語2)	合計
4	青森	の	おみやげ	8
	宮島	で	煮魚	
	2	2	2	
3	長野	の	飲み屋	8
	上野	で	煮物	
	2	2	2	

表3. 調査語彙の組み合わせと個数 (単文読み)

音節数	前部要素 (語1)	助詞	後部要素 (語2)	合計
4	青森	の	おみやげ	4
	宮島		煮魚	
	2	1	2	
3	長野	の	飲み屋	4
	上野		煮物	
	2	1	2	

表 4. 調査語彙の組み合わせと個数 (台本のある会話)

方言アクセントと標準語アクセントの組み合わせは、4音節の「おみやげ」(鹿児島方言, 標準語ともに平板式)と「煮魚」(鹿児島方言, 標準語ともに起伏式)以外の6語は、鹿児島方言で起伏式の場合は標準語では平板式, およびその逆の対応関係がある。

単文読みタスクにおいては、以下のような文をリストのかたちで調査協力者に提示し、できるだけ自然に読むよう求めた。

語1 語2

[青森 の][おみやげ を] たくさんもらった

図 3. 調査文の例 (単文読み)

台本会話タスクにおいては、方言話者同士2人1組で用意された台本を参照しながら、1分程度の短い会話を行わせ、その音声を収録した。

1.3 話者

話者は鹿児島市を中心として、おもにその周辺地域(薩摩半島)で生育した20代前半の若年層話者20名(男性10名, 女性10名)である。小学校入学前後を境に、それ以後鹿児島市内に居住している場合は鹿児島市生育とした。それ以外は鹿児島市以外生育としている。また、親の方言が子の言語に影響する可能性は大いにあるが(cf. 竹村2010), 福岡県出身の両親を持つ女性1名以外はすべて鹿児島方言話者の両親である。また、大隅半島は宮崎県に近い地域では二型ではなく一型アクセントであるため、子の言語に影響を受けている可能性もある。大隅半島出身の親をもつ学生は2名いた。父親が旧末吉町出身の女性1名と母親が旧高山町出身の男性1名であるが、以下で述べるように分析結果を見ると、親の方言が影響を与えている可能性は低いと思われる。

生育地	性別と人数
鹿児島市	男性 4 名 女性 4 名 (うち 1 名は旧末吉町出身の父親)
鹿児島市以外	男性 6 名 (うち 1 名は旧高山町出身の母親) 女性 6 名 (うち 1 名は福岡県出身の両親)

表 1. 話者の構成

2. アクセント型交替のモデル化

言語変異理論では、バリエーションに関わる言語内的、言語外的要因を仮定し、それらが変異形の出現に影響をあたえるか、あたえるとすればどの程度かを統計分析によって確認する手順を取る。本稿でも「ある事象が起きる/起きない (従属変数) にどのような要因 (独立変数) がどれだけ影響をあたえるかを算出する」際に利用されるロジスティック回帰分析により、仮定したアクセント型交替のモデルの有効性を検証する。

2.1 統計モデル

2.1.1 従属変数

本稿の目的は、鹿児島方言でのアクセント型が標準語のアクセント型と一致する際に影響をあたえる要因は何かを追求することである。それはすなわち、「標準語と同じ音調型 (ピッチ下降あり/なし) であるかどうか」を従属変数とし、変異形の産出に作用すると推測される要因を独立変数とする理論モデルを仮定するというかたちでとらえられる。

鹿児島方言のアクセント型交替の場合、従属変数には次の 2 つが考えられる。

(1) 調査語彙の産出された音調が標準語の「起伏式」に一致する場合

「青森 (あおもり) の…」 (起伏式)
 (標準語) LHLL-L
 (データ) LLLH-L → 1 (変異あり) 交替型
 LLLL-H → 0 (変異なし) 従来型

(2) 調査語彙の産出された音調が標準語で「平板式」に一致する場合

「宮島 (みやじま) の…」 (平板式)
 (標準語) LHHH-H
 (データ) LLLL-H → 1 (変異あり) 交替型
 LLLH-L → 0 (変異なし) 従来型

図 4. 調査語彙のコード化

(1)の場合は、たとえば「青森の…」であれば、従来の鹿児島方言では、LLL-Hのように、「ピッチ下降」のない音調（すなわちB型）であるが、標準語では LHLL-Lで2モーラ目に「ピッチ下降」がある。この場合、鹿児島方言スタイルで LLLH-Lの起伏式（すなわちA型）で発音されれば、「起伏式に一致した」と考え、1（=変異あり）とコード化する。一致しない（B型、標準語型もしくは未知の型等）場合、0（=変異なし）とコード化する。また(2)の場合は、これとは逆に従来は起伏式A型の「宮島の…」は、標準語では平板式音調なので、平板式のB型であれば1、それ以外であれば0とコード化する。以下、(1)を「起伏式対応変異」、(2)を「平板式対応変異」と呼ぶことにする。

2.1.2 独立変数

アクセント型交替の変異形出現に関与すると推測される言語内、言語外の要因は以下のとおりである。

言語内要因

- ・助詞（の/で）【質的変数】
- ・調査語の音節数（3/4）【質的変数】

言語外要因

- ・スタイル（単文読み/台本会話）【質的変数】
- ・社会的属性
 - ジェンダー（男/女）【質的変数】
 - おもな生育地（鹿児島市/それ以外）【質的変数】
- ・現在の友人間での社会ネットワーク密度
- ・方言接触：現在の友人間で、県外に住む友人と、県外に住む親戚と
- ・社会的実践：バイト、サークルなど
- ・パーソナリティ：性格5因子（ネトル 2009）
- ・メディア実践
 - 一週間にテレビがオンの時間数
 - 子どもの頃のアニメ視聴の度合い
 - 現在の番組視聴の度合い：情報系番組、娯楽系番組、ポップカルチャー系番組

これらの情報は調査時にアンケート質問票により得た回答による。すべての変数を一度に統計分析に投入しても必ずしも良い結果が得られるわけではないので、従属変数と独立変数の関係をクロス集計や相関分析等である程度絞り込んだのち、最終的なモデルを仮定し、その検証を行った。

2.2 質的独立変数

以下クロス集計とカイ二乗検定の結果をもとに質的変数と変異の関連を検討する。表2から11の中の数字はすべてデータの個数を表す。表中の「対応」は交替型変異形が生じたことを、「非対応」は生じなかったことを意味する。

2.2.1 言語内要因

まず言語内要因としては、助詞と音節数を仮定した。これらの要因とふたつの変異それぞれの生起／非生起との関連をカイ二乗検定で確認したところ、助詞は起伏式対応変異、平板式対応変異のどちらも関連性は見られなかった（表2、表3）。一方音節数は起伏式対応変異の場合が $\chi^2=26.162$, $p < .001$, 平板式対応変異も $\chi^2=49.336$, $p < .001$ で、どちらも関連性が推測される結果になった（表4、表5）。

	の	で	合計
非対応	109	49	158
対応	211	111	322
合計	320	160	480

表2. 起伏式変異と助詞
 $\chi^2 = .571$, $df = 1$, n.s.

	の	で	合計
非対応	152	84	236
対応	168	76	244
合計	320	160	480

表3. 平板式変異と助詞
 $\chi^2 = 1.067$, $df = 1$, n.s.

	3音節	4音節	合計
非対応	105	53	158
対応	135	187	322
合計	240	240	480

表4. 起伏式変異と音節数
 $\chi^2 = 26.162$, $df = 1$, $p < .001$

	3音節	4音節	合計
非対応	155	81	236
対応	85	159	244
合計	240	240	480

表5. 平板式変異と音節数
 $\chi^2 = 49.336$, $df = 1$, $p < .001$

2.2.2 スタイル要因

次にスタイルの影響である。スタイルは単文読み（表中は「文」と記す）と台本のある会話（表中は「会話」と記す）のふたつのレベルがある。起伏式対応変異では関連性は見られなかったが（表6）、平板式対応変異では $\chi^2=4.268$, $p < .05$ で関連性が見られる結果となった（表7）。

	単文	会話	合計
非対応	98	60	158
対応	222	100	322
合計	320	160	480

表6. 起伏式変異とスタイル
 $\chi^2 = 2.283$, $df = 1$, n.s.

	単文	会話	合計
非対応	168	68	236
対応	152	92	244
合計	320	160	480

表7. 平板式変異とスタイル
 $\chi^2 = 4.268$, $df = 1$, $p < .05$

2.2.3 社会的属性

ジェンダーは起伏式対応変異が有意だが（表8）、平板式対応変異に有意差は見られない（表9）。おもな生育地は起伏式対応変異が $\chi^2=12.380$, $p < .001$ （表10）、平板式対応変異が $\chi^2=11.203$, $p < .01$ と（表11）、ともに関連性が仮定される。

	男性	女性	合計
非対応	51	107	158
対応	189	133	322
合計	240	240	480

表 8. 起伏式変異とジェンダー
 $\chi^2=29.587$, $df=1$, $p < .001$

	男性	女性	合計
非対応	121	115	236
対応	119	125	244
合計	240	240	480

表 9. 平板式変異と助詞ジェンダー
 $\chi^2= .300$, $df=1$, n.s.

	市内	その他	合計
非対応	64	94	158
対応	80	242	322
合計	144	336	480

表 10. 起伏式変異と生育地
 $\chi^2=12.380$, $df=1$, $p < .001$

	市内	その他	合計
非対応	54	182	236
対応	90	154	244
合計	144	336	480

表 11. 平板式変異と生育地
 $\chi^2=11.203$, $df=1$, $p < .01$

2.2.4 その他の言語外変数（量的変数）

量的変数には、対人関係、方言接触、日常行動、性格など話者たちを多面的にとらえるための要因を仮定した。また、Kubozono (2007) が述べるマスメディアによる言語接触との関連をとらえるために、「テレビの話をする」、「一週間にテレビがオンの時間数」、「子どもの頃のアニメ視聴の度合い」、「現在の番組視聴の度合い」「一週間にテレビがオンの時間長」など、いくつかのメディア視聴に関わる変数を仮定した。最終的な統計分析には独立変数を絞る必要があったので、事前の分析を行い、このうち「子どもの頃のアニメ視聴の度合い」と「現在の番組視聴の度合い」を採用した。

「現在の番組視聴の度合い」は、「ドラマ」や「バラエティ」などの10のジャンルで「よく見る」から「まったく見ない」の5件法でたずねた。そののち、すべてのジャンルを主成分分析にかけ、次の3つの主成分を抽出し、「情報系番組視聴」、「娯楽系番組視聴」、「ポップカルチャー系番組視聴」と名づけた。それぞれの主成分に含まれるおもなジャンルと主成分得点は次のとおりである。³主成分分析は固有値1までの主成分を採用した場合、5つの主成分が抽出されたが、第4主成分（ドラマ・娯楽系）、第5主成分（実況系）は他の独立変数との相関が見られたので、第3主成分までを採用した。第3主成分までの寄与率は56.23%である。

3 若者に好評なローカル情報番組（たとえば、南日本放送の「TEGE2」など）はバラエティ色が強いために娯楽系で最も得点が高かった。ただし、情報系での得点も.545と高く、情報番組と見なされている面もある。

情報系：全国情報番組 (.831), ニュース (.631)

娯楽系番組：バラエティ番組 (.671), ローカル情報番組 (.593), 関西系バラエティ番組 (.412)

ポップカルチャー系：アニメ (.706), 歌番組 (.574)

多変量解析に進む前に情報系番組の視聴とポップカルチャー系番組の視聴、および幼児期のアニメの視聴度合い、および標準語使用能力について、起伏式と平板式への対応を確認しておきたい。

まず情報番組の視聴だが、図5から起伏式対応では正の相関 ($r = .265$) が、図6からは平板式対応にはわずかながら負の相関 ($r = -.110$) の傾向が見られる。次にポップカルチャー番組の視聴は、図7, 8の予測直線には、情報番組とは逆に起伏式対応で負の傾き ($r = -.292$) が、平板式対応では正の傾き ($r = .123$) が見られる。

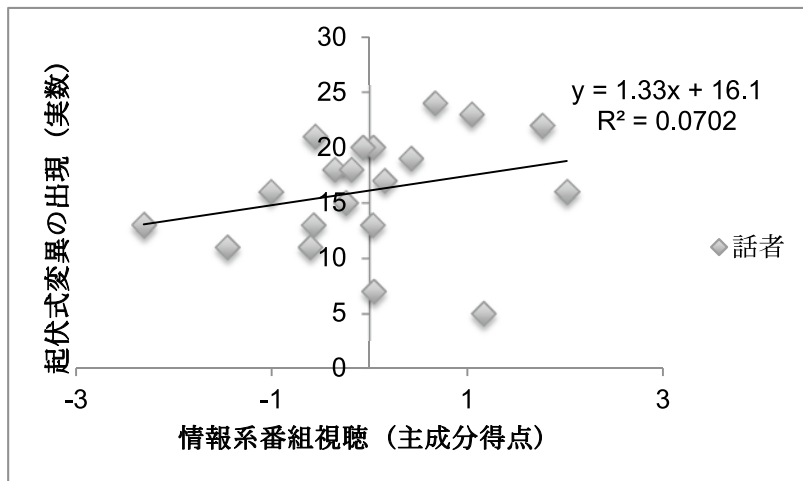


図5. 情報系番組の視聴 (横軸) と起伏式変異の出現 (縦軸)

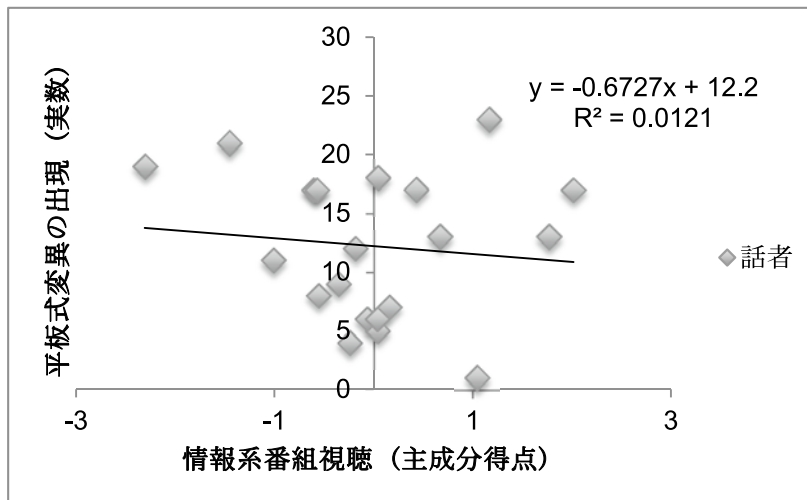


図6. 情報系番組の視聴 (横軸) と平板式変異の出現 (縦軸)

最後に幼児期のアニメ視聴である。図9のとおり、平板式対応には正の傾き($r = .214$)が見られる。一方、図示していないが、起伏式対応にはほとんど傾きは見られなかった($r = -.003$)。

くわえてこの分析モデルでは、ピッチ下降あり／なしの選択には話者の標準語使用能力が関与するのではないかと仮定し、標準語能力を示すと考えられる変数を組み込んだ。この変数は、標準語スタイルでの標準語音調と完全に一致する音調が現れた場合1点をくわえて構築した(得点のレンジ19-48, 平均40.7)。図10のとおり、平板式対応変異には正の傾きが見られた($r = .339$)が、起伏式変異はわずかに負の傾き($r = -.088$)が見られた程度であった。

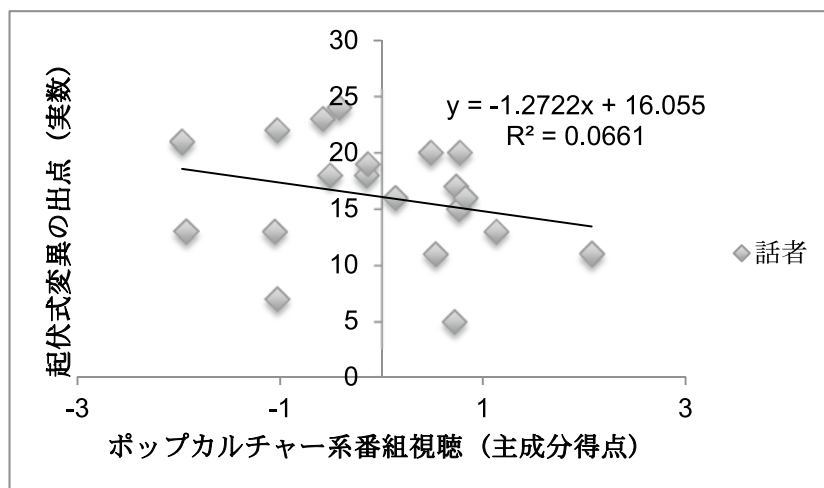


図7. ポップカルチャー系番組の視聴 (横軸) と起伏式変異 (縦軸)

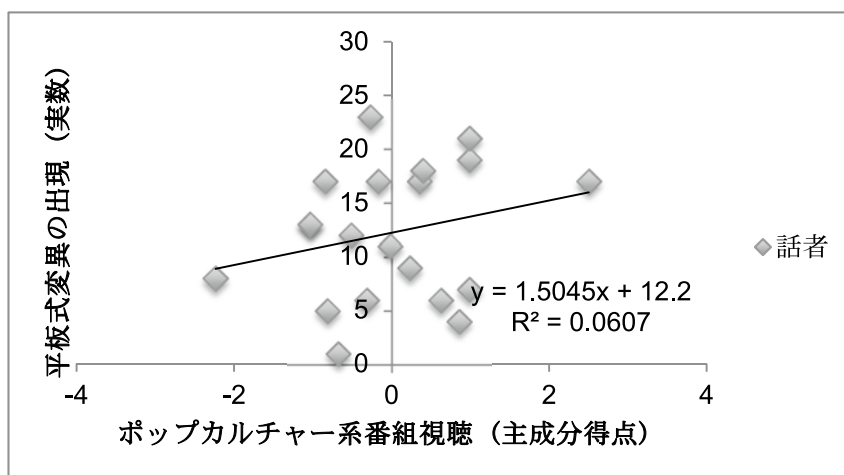


図8. ポップカルチャー系番組の視聴 (横軸) と平板式変異 (縦軸)

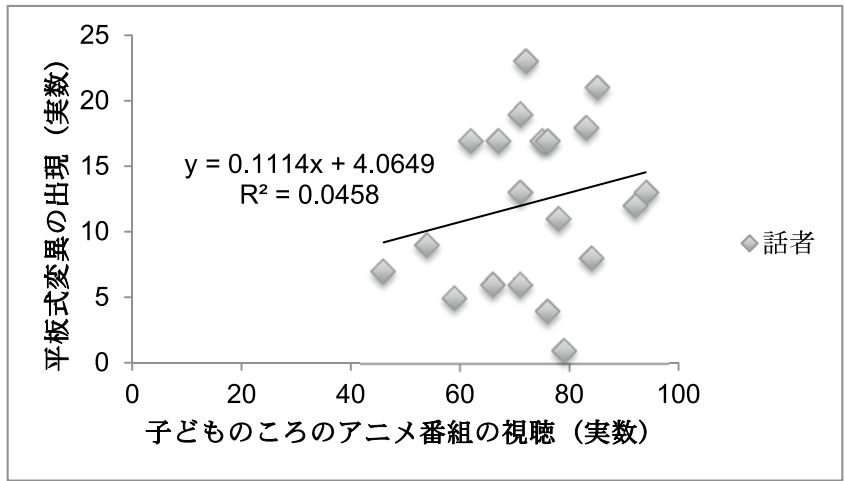


図 9. 幼児期のアニメ視聴と平板式変異

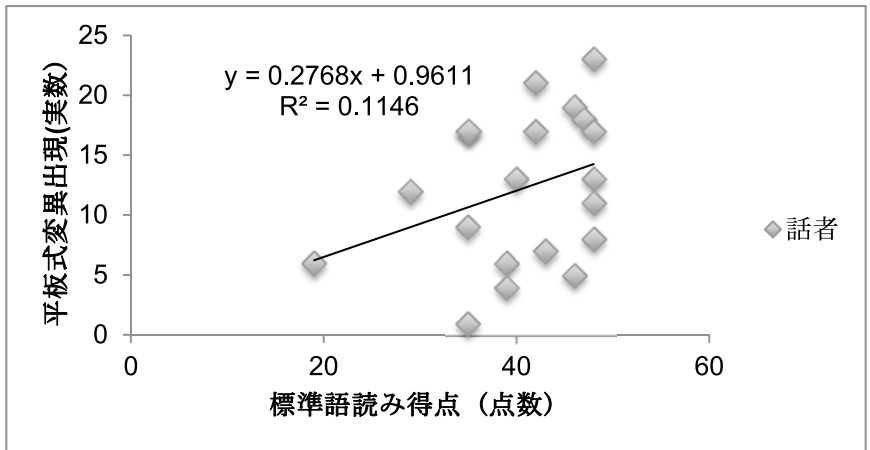


図 10. 平板式変異の出現（横軸）と標準語得点（縦軸）

カテゴリー変数	ジェンダー 生育地 スタイル 音節数
量的変数	社会ネットワークの密度 社会ネットワーク内での言語接触 子ども時代のアニメ視聴の度合い 情報系番組視聴 娯楽系番組視聴 ポップカルチャー系番組視聴 標準語得点

表 12. 投入した変数

これらの変数同様、他の量的変数もグラフで視覚的にデータの分布を確認し、多変量解析への変数の決定と結果の解釈に利用した。その結果、表12に挙げた変数を量的独立変数とした。

3. 多変量解析

前節の結果を考慮し、アクセント交替の説明モデルに必要と思われる独立変数を取り替えながらロジスティック回帰分析を繰り返した。⁴ その結果、それぞれについて表13と14のような結果が得られた。

分析結果の検討の前に、南部（2007）、佐野（2008）を参考に、結果の読み方を確認しておきたい。左1列目のBは個々の独立変数の影響度を表す回帰係数である。この場合、プラスであれば標準語のアクセント型に対応する確率が高く、マイナスであれば対応する確率が低いということを意味する。この値が大きいかほどその要因の影響度は大きいと考えられる。SE（標準誤差）はバラツキの指標である。値が大きいかとデータのバラツキも大きいということになる。次のWald検定値は、回帰係数が有意かどうか判断するためのものであり、となりのdf（自由度）を利用して χ^2 検定が行われる。その際の確率が次のSig.である。6列目のExp(B)は、ある事象の起こりやすさを表す指標（オッズ比）である。回帰係数は独立変数の単位の影響を受けるため、変数間の影響度の比較が難しくなるときがある。その点オッズ比は、その要因に対する他の要因の影響が考慮されて算出された値であり、純粋にその要因の変異への影響の大きさを表しているため、要因間で影響度の比較を行う際にはオッズ比の方を目安とする方がよい。オッズ比は1を規準としてそこから離れるほどその要因の影響が大きいと解釈される。1より大きいほど起こる確率が上がり、1より小さいほど起こる確率が下がると判断できる。残りの2列はこのオッズ比の95%信頼区間である。

また表を読む際に注意しておきたいのは、質的変数は表中の変数名の後のカッコ内に示されたレベルの統計量が記述されているという点である。たとえば「ジェンダー（女）」の項目には、「ジェンダー（男）」を参照カテゴリーとした場合の女性に関する統計量が表されている。表13では、女性は男性に対し、この変異の現れる確率が0.25倍である（もしくは0.25倍しかない）ことを意味している。

では結果の検討へ移るが、独立変数は質的変数と量的変数が混在しているので、Exp(B)を中心に検討を行う。表13の起伏型対応変異では、Exp(B)の値（3.29）から音節数（4）がもっとも影響力が大きいことがわかる。これは表2でも説明したように、4音節語では標準語と同じアクセント型を持つ語が4語中2語ある（起伏式、平板式それぞれ1語ずつ）ためと考えられる。次に生育地（市外）の値が大きい（1.68）。3番目に大きいのは「情報番組見る」である（1.47）。この3つが起伏式への対応（＝起伏式アクセントの出現）に影響すると思われる要因である。その他の要因はすべてBが負の値をとっており、起伏式への対応の確率が低いものと考えられる。とくに「ポップカルチャー番組を見る」と「ジェンダー（女）」はWald検定で有意な値を示しており、これらは起伏式の出現確率を低くする要因と見なされる。

⁴ 利用した統計ソフトはIBM SPSS 22のロジスティック回帰分析である。

N = 480, Nagelkerke R Square: .240		B	S.E.	Wald	df	Sig.	Exp(B)	95% C.I. for EXP(B)	
要因								Lower	Upper
ジェンダー(女性)		-1.38	0.27	26.84	1	0.000	0.25	0.15	0.42
生育地(市外)		0.52	0.30	3.03	1	0.082	1.68	0.94	3.01
音節数(4)		1.19	0.22	29.18	1	0.000	3.29	2.14	5.07
スタイル(台本会話)		-0.38	0.23	2.89	1	0.089	0.68	0.44	1.06
社会ネットワークの密度		-0.02	0.02	0.37	1	0.545	0.99	0.94	1.03
社会ネットワーク内での言語接触		-0.04	0.13	0.10	1	0.754	0.96	0.74	1.24
子ども時代のアニメ視聴の度合い		-0.03	0.01	5.31	1	0.021	0.97	0.95	1.00
TV1: 情報系番組視聴		0.39	0.12	9.93	1	0.002	1.47	1.16	1.87
TV2: 娯楽系番組視聴		0.18	0.13	1.77	1	0.183	1.19	0.92	1.55
TV3: ポップカルチャー系番組視聴		-0.30	0.11	7.53	1	0.006	0.74	0.60	0.92
標準語得点(単文読み+台本会話)		-0.01	0.02	0.52	1	0.469	0.99	0.96	1.02
定数		3.70	1.08	11.83	1	0.001	40.33		

表 13. 起伏式対応変異についての結果

N = 480, Nagelkerke R Square: .283		B	S.E.	Wald	df	Sig.	Exp(B)	95% C.I. for EXP(B)	
要因								Lower	Upper
ジェンダー(女性)		-0.16	0.26	0.37	1	0.541	0.86	0.52	1.41
生育地(市外)		-1.19	0.28	18.43	1	0.000	0.31	0.18	0.52
音節数(4)		1.52	0.21	50.77	1	0.000	4.56	3.00	6.92
スタイル(台本会話)		0.48	0.22	4.74	1	0.029	1.62	1.05	2.50
社会ネットワークの密度		0.09	0.03	10.99	1	0.001	1.09	1.04	1.14
社会ネットワーク内での言語接触		0.09	0.12	0.50	1	0.478	1.09	0.86	1.38
子ども時代のアニメ視聴の度合い		0.04	0.01	10.49	1	0.001	1.04	1.02	1.06
TV1: 情報系番組視聴		-0.14	0.12	1.49	1	0.222	0.87	0.69	1.09
TV2: 娯楽系番組視聴		-0.18	0.12	2.16	1	0.142	0.84	0.66	1.06
TV3: ポップカルチャー系番組視聴		0.27	0.11	6.22	1	0.013	1.31	1.06	1.62
標準語得点(単文読み+台本会話)		0.07	0.02	17.12	1	0.000	1.07	1.04	1.10
定数		-7.38	1.07	47.41	1	0.000	0.00		

表 14. 平板式対応変異についての結果

次に表14の平板式対応変異を見てみたい。Wald検定有意のもので「対応」の確率が高い要因をExp(B)の大きい順に挙げると、「音節数(4)」(4.56),「スタイル(台本会話)」(1.62),「ポップカルチャー番組を見る」(1.31),「ネットワーク密度」(1.09),「子ども時代のアニメ視聴の度合い(1.04)」となる。ここでも音節数は一番強力だが、メディア要因(ポップカルチャー、アニメ)などの影響も認められることは注意したい。起伏式対応の情報番組と同じく、平板式への音調の対応でもメディアが何らかの影響をもつ可能性が示唆されていると言える。この点はあらためて次節で論じる。

「社会ネットワーク密度」と「社会ネットワーク内での言語接触」は、言語変化促進の要因と言われる「対面(face-to-face)コミュニケーション」の影響を測るために加えた変数である(cf.

Labov 2001, Trudgill 1986)。結果を見ると、友人間のネットワークは密度が高い方が、平板式対応の生起に影響をもつと言える。起伏式対応にはほとんど影響がない。「社会ネットワーク内での言語接触」は、両方の変異に影響しない。

Milroy (1980) などの社会ネットワークと言語変化の関連についての研究では、ネットワークの密度が高い集団はよく似た伝統的言語変異が共有・維持されている場であった。しかしながら、本稿の調査対象である学生たちを観察していると、少なくとも学校生活においては単純に他者への言語的アコモデーションを行うのではなく、自分の生育地の方言的特徴も交えながら共に日常生活を送っているように感じられる。つまり、多少の言語的異なりを感じながらも相手の社会的背景の一部として相互に認め合うようなつきあい方をしていると考えられる。昨今の方言ブームのせい、方言の価値観が変わった現代では、ネットワークの密度は必ずしも共通の言語変異の共有を担保するものではないのだろう。⁵

スタイル要因は両方の変異で台本会話の方がアクセント型交替との関連が見られる。起伏式対応は負の方向へ ($\text{Exp}(B) = .68$, ただし, $p < .10$), 平板式対応は正の方向へ ($\text{Exp}(B) = 1.62$) と関与している。理由ははっきりしないが、台本を参照しながらの会話でも単文読みより多少自然さが増すことによるのかもしれない。以上がふたつの音調変異への多変量解析のおもな結果である。

4. 考察

この節では、メディア実践に関わる要因を取り上げ、Kubozono (2007) が指摘するマスメディアによる言語接触とアクセント型交替の可能性について検討し、メディアと言語変異との関連を考えてみたい。

欧米の社会言語学では、たとえばChambers (1988) のように、都市部の下層市民たちは1日に何時間もテレビを見るが、そのことばはテレビのことばに似るどころかむしろ離れていくという例をひいて、テレビの視聴は言語変化に体系的な影響を与えないと言われてきた。しかしながら、これは単純な「刺激と反応」にもとづいた仮説であり、テレビ等のメディアの影響はそのように簡単にとらえることができるものではない (cf. Stuart-Smith et al. 2013, Stuart-Smith and Ota 2014)。

ただ、対面の言語接触にしるメディアに媒介されるにしる、継続的なexposureが外部からの言語変異の取り込みのきっかけになることも否定はできない。たとえば言語習得期の子どもたちの言語認知のメカニズムを考えた場合、言語接触場面で認知システムがどのように機能するのか、どのような場合に外部の言語特徴の取り込みが生じるのかなど点から議論が必要になると思われる。本研究においては、exposureの指標として「一週間にテレビがオンの時間長」という変数を仮定して分析を進めた。ふたつの独立変数との相関係数が0.4を超えるなど、ほとんどの変数と相関が疑われたので、この変数は最終の統計モデルからは除外したが、従属変数の起伏式対応と $r = -.344$, 平板式対応と $r = .120$ とこちらでも多少の相関が見られる。この調査ではテレビの電源が入っている時間という意味で質問をしたが、集中して視聴する時間や集中の度合いなどは不明であり、これらの

5 調査票では現在の社会ネットワーク内の友人がどの方言を使うかをたずねているが、ほとんどが鹿児島以外の九州、もしくは鹿児島県内の離島である。九州以外では関西と北海道がそれぞれ1名いたのみである。このような事情も結果に影響している可能性はあると思われる。

点についてもさらに細かく調べる必要があると思われる。いずれにしろ、exposureという状況を言語変化へつなげて論じることは少し慎重さをもつべきであることはまちがいない。

次にTV番組視聴とアクセント型交替の関係である。起伏式対応変異では「情報系番組」のみが正の関連を示した(1.47)が、「ポップカルチャー系番組」はそれとは逆の結果(0.74, すなわち起伏式の生起確率を減らす)が認められた。対照的に、平板式対応では、「ポップカルチャー系番組」が確率を高め(1.31)、「情報系番組」は影響がみられない結果となった。また「子どものころのアニメ視聴」は、Exp(B)は1.04と大きな影響ではないものの、有意な変数と判断される。「情報系番組」では言語的要素を含め社会通念上の規範的な要素により構成されることが多いこと、反対に「ポップカルチャー番組」はむしろ脱規範的傾向が強くなることを考えると、この違いは単なる言語そのものへの反応というより、情報系番組やポップカルチャー系番組が提示するものに向かう意識の問題というとらえ方をすべきなのかもしれない。なぜなら、メディアが提示する「もの」はテキストとして解釈の対象となり、その意味の読み込み、読み換えの中において言語変異ははじめて「社会的意味」を持ち得るからである(cf. 石田2003, 吉見2004, 太田2005)。上述のexposureとの関連でいえば、ある言語変異に触れ続けることはその形式の認知、言語システムへの取り込みに通じるのかもしれない。しかしながら、その際には必ず何らかの解釈の作業が付随していると考えられる。「情報番組系の視聴」が起伏式への、「ポップカルチャー系番組の視聴」が平板式との対応への親和性を表しているというのであれば、アクセント型の交替は単に言語的な影響だけを問題として位置づけるのではなく、これらの番組カテゴリーが話者たちにとってどのような意味をもつかということとの関連でとらえる必要があると思われる。

おわりに

本稿ではアクセント型交替を複数の言語内、言語外要因の影響によるものと考え、多変量解析による統計モデルの検証というかたちでその妥当性を考えた。テレビを中心としたマスメディアがあたえる影響はこれまでもいろいろなかたちで論じられてきたが(Ota and Takano 2014)、統計分析による検証は十分に行われて来なかった。今回の分析では言語変異とメディアの関連が多少なりとも提示できたと思うが、言語へのメディアの影響は社会科学や自然科学との複合的な研究を行うことによりさらにあきらかにされねばならない問題である。また今回の分析には含めなかったが、MAP内での音調の連続のパターンによってもアクセント型の交替は何らかの影響を受けている可能性がある。⁶ これらも含めて、また単語読みや自然談話の分析等と併せてさらに今後検討を重ねる必要がある。

謝辞

本稿は第39回九州方言研究会(2015年1月11日 熊本大学)において発表した内容を整理し執筆したものである。会場で有益なコメントをいただいた方々に感謝申し上げる。本研究で使

⁶ 児玉望氏のご指摘による。

ンケート調査票は、英国グラスゴー大学のGlasgow Media Project で使用されたものをもとに鹿児島の実情に合わせて作成したものである。プロジェクトリーダーのJane Stuart-Smith氏をはじめ、関係者各位に感謝申し上げる。また、本研究は以下の研究援助を受けた成果の一部である。

(1) 平成26年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）（研究代表者：太田一郎 課題番号：24652082）「メディアの影響を組み込んだ言語の習得と変化に関する理論モデル構築の試み」

(2) 平成26年度科学研究費補助金（基盤研究B）（研究代表者：松田謙次郎 課題番号：25284082）「変異理論の新展開と日本語変異データの多角的分析」

参考文献

- Chambers, J.K. (1988) Myth 15: "TV makes people sound the same." In Laurie Bauer and Peter Trudgill (eds.), *Language Myths*, pp. 123-131. Harmondsworth: Penguin Books.
- 平山輝男 (1960) 『全国アクセント辞典』東京堂出版
- 石田英敬 (2003) 『記号の知／メディアの知-日常生活批判のためのレッスン』東京大学出版局
- Labov, William (2001) *Principles of Linguistic Change Vol 2: External factors*. Oxford: Blackwell.
- Kubozono, Haruo (2007) Tonal change in language contact: Evidence from Kagoshima Japanese. In Tomas Riad and Carlos Gussenhoven (eds.) *Tones and Tunes. Volume 1: Typological Studies in Word and Sentence Prosody*, pp. 323-351. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 窪菌晴夫 (2007) 鹿児島方言のアクセント変化-複合法則の崩壊-. *Kobe Papers in Linguistics* 5, pp. 111-123.
- Milroy, Lesley (1980) *Language and Social Networks*. Oxford: Blackwell.
- 南部智史 (2007) 定量的分析に基づく「が／の」交替再考. 『言語研究』131号, pp. 115-150.
- ネトル, ダニエル (2009) 『パーソナリティを科学する—特性5因子であなたがわかる』(竹内和代訳) 白揚社
- 太田一郎 (2005) 言語変異の社会的意味と言語イデオロギー. 『人文学科論集』No.61, pp.45-58. 鹿児島大学法文学部.
- 太田一郎 (2012) 日本語のメロディを考える. 日比谷潤子 (編著) 『はじめて学ぶ社会言語学』, pp. 155-175.
- 太田一郎・竹村亜紀子・二階堂整 (2013) 鹿児島市方言話者の語彙音調型選択について. 『人文学科論集』No.78, pp.1-10. 鹿児島大学法文学部.
- 太田一郎・光瀬めい (準備中) 鹿児島方言アクセントの世代間変異について.
- Ota, Ichiro and Shoji Takano (2014) The media influence on language change in Japanese sociolinguistic context, *Mediatization and sociolinguistic change* (Jannis Androutopoulos (ed.)) Walter de Gruyter: Berlin., pp.171-203.
- 佐野真一郎 (2008) 『日本語話し言葉コーパス』に現れる「さ入れ言葉」に関する数量的分析. 『言語研究』133号, pp. 77-106.
- Stuart-Smith, J., Pryce, G., Timmins, C., and Gunter, B. (2013) Television can also be a factor in language change: evidence from an urban dialect. *Language*, 89(3), pp. 501-536.
- Stuart-Smith, Jane and Ichiro Ota (2014) Media models, 'the shelf', and stylistic variation in East and West. Rethinking the influence of the media on language variation., *Mediatization and sociolinguistic change* (Jannis Androutopoulos (ed.)) Walter de Gruyter: Berlin., pp.127-170.
- 竹村亜紀子 (2010) 『方言習得における親の母方言の影響』博士学位論文 (神戸大学) .
- Trudgill, Peter (1986) *Dialects in Contact*. Oxford: Blackwell.
- 吉見俊哉 (2004) 『メディア文化論』有斐閣

